



◎金沢高等師範学校に設置された「特別科学学級」を母体に1947年開校。「自主自律」「独立自治」を重んじた学校運営を行う。2003年度、文部科学省「学力向上フロンティアハイスクール事業」、14年度、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」の指定を受ける。

<b>設立</b>	1947(昭和22)年
<b>形態</b>	全日制／普通科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約120人
<b>2014年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立大は、東北大、筑波大、東京大、一橋大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大などに90人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、早稲田大、金沢医科大学、同志社大、立命館大などに延べ173人が合格。
<b>住所</b>	〒921-8105 石川県金沢市平和町1-1-15
<b>電話</b>	076-226-2154
<b>Web Site</b>	<a href="http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/">http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/kfshs/</a>

石川県・国立

## 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校

### スーパーグローバルハイスクール(SGH)

# 地域→海外と段階的に 発展させる課題研究で グローバル人材を育成

#### 変革のステップ

##### 背景

◎受験対策にやや傾斜した指導や生徒の地元志向の高まりにより、生徒の可能性を十分に広げられていないという課題意識を持つように

##### 実践

◎SGHの指定を受けて、従来の課題研究を改善した「課題研究一貫カリキュラム」を構築。外部と連携した活動を推進

##### 成果

◎生徒たちが「課題研究は自分の将来のためになる」と認識し、研究活動に積極的に取り組むようになった

「地球サイズの教育」を行う  
原点に戻ってリーダー育成を開始

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高校  
 (\*の教師たちは、教育活動に停滞を感じていた。  
 1学年約120人のうち、毎年80人以上が国公立大に合格していたものの、東京大や京都大といった最難関大の志望者が減少していた。研究部主任の山本吉次先生はこう述べる。  
 「教科指導や進路指導で大学受験を意識し過ぎ、生徒の力を十分に伸ばせていないのではないかと課題意識が教師間にあり、生徒の可能性を最大限に広げるために、人間力を育て、キャリア意識を形成する教育活動を充実させる必要性を感じていました」  
 2012年2月、全教師参加の研修会を開いた。数人ずつのグループに分かれ、学校の良い点や改善点などの考えを出し合い、KJ法で整理し、若手教師が全体に発表した。これを基に、同年4月、「学校改善プロジェクト」を立ち上げ、その下で「授業改善プロジェクト」「進路指導改善プロジェクト」など、5つのプロジェクトを始めた。各プロジェクトのリーダーは、メンバーの中で最も若い教師に任せ、更に「進路指導改善プロジェクト」には進路指導部長は加わらないなど、ボトムアップの取り組みとなるようにした。同校の教師は30代前後と50代が多く、間をつなぐ中堅層が少ない。そこで、若手が意

\*以下、金沢大学附属高校

見を出しやすい雰囲気づくりを重視した。

当初、そうした工夫は若手教師の意欲を喚起したが、プロジェクトが1年過ぎた頃、やや行き詰まりを感じるようになったという。そんな中、若手で取り組みを牽引してきた数学科主任の外山康平先生はある行動に出る。

「それまで本校には学校目標がなく、生徒の成長イメージを言葉として、教師間でしっかりと共有できていませんでした。そこで、学校改善の方向性が明確には定まっていなかったことを、管理職の先生に問題提起しました」



金沢大学附属高校副校長  
**風間重利** かざま・しげとし  
教職歴35年。同校に赴任して25年目。「足元と遠方を同時に見ることに。消極的・悲観的にモノを見ない。道はある」



金沢大学附属高校  
**山本吉次** やまもと・よしとく  
教職歴31年。同校に赴任して31年目。主幹教諭。研究部主任。「広い視野と豊かな教養を備えた人間力を育てる」



金沢大学附属高校  
**高橋栄一** たかはし・えいいち  
教職歴29年。同校に赴任して30年目。1学年主任。「広い視野を持ち、自分で決断して行動できる人間を育てる」



金沢大学附属高校  
**外山康平** とやま・こうへい  
教職歴8年。同校に赴任して9年目。数学科主任。「生徒が前に進める指導をするために、教師自身が学び挑戦する」

同校には、明文化された学校目標はなかったが、歴史的・伝統的に受け継がれる教育方針があった。1947年の開校時、初代主事（校長）が「昭和の松下村塾たれ」と、新しい日本を背負う人材を育成する意気込みを語った。その原点に立ち返り、学校目標の明文化に動き出した。

そのような中、文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」公募の情報が入ってきた。国が目指すグローバルな人材像と学校目標には重なる部分が多かったため、これまでの活動を整理し、SGHに申請したところ採択された。風間重利副校長はこう語る。

「『学校改善プロジェクト』を通して多方向から教育活動の改善を図ってききましたが、SGHを軸にすることで、活動の方向性がまとまりやすくなると考えました。プロジェクトは13年度でいったん終了しましたが、その活動はSGHでの活動に引き継がれています」  
そして、SGH事業の開始と共に、学校目標を定めた。「本校は、国際社会や地球生態系における共生者として、また個性豊かな文化の創造者として、積極的に自己の責任を果たしていく人間を育てる『地球サイズの教育』を行う」だ。

### 地域の課題を出発点に グローバルな課題解決に挑む

SGHのテーマは「北陸からイノベーション

で世界を変えるグローバル・リーダーの育成」(図)とした。柱となる取り組みは、「課題研究一貫カリキュラム」だ。3年間で「地域課題研究」「異文化研究」「グローバル提案」「グローバルキャリアパス」と段階的に進め、グローバルリーダーとしての資質を育む。このカリキュラムは、同校が約20年間にわたり培ってきた課題研究(00年からは「総合的な学習の時間」で実施)を土台に構築した。SGH1年目であり、計画段階の活動もあるが、その流れを見ていく。  
1年生の1、2学期には「地域課題研究」を行う。「地域やそこに暮らす人々を幸せにする

#### 図 「北陸からイノベーションで世界を変えるグローバル・リーダーの育成」概要

##### 課題研究一貫カリキュラム

###### 3年生1学期 グローバル・キャリアパス

グローバル・リーダーとしての将来像と、そこに到達するためのキャリアパスを描く

###### 2年生 グローバル提案

グローバル課題の解決策を模擬国際会議方式で議論し、海外の高校生に発表する

###### 1年生後半 異文化研究

台湾師範大学附属高級中学校の生徒と日台文化比較調査をし、レポートにまとめる

###### 1年生前半 地域課題研究

グローバル社会とつながる地域課題について、解決策を提案する

###### 【海外連携機関】

- ・北京師範大学、同附属高校
- ・香港大学
- ・台湾師範大学、同附属高級中学校
- ・ソウル国立大学
- ・釜山国立大学
- ・韓国科学アカデミー
- ・ウラジオストク国際言語学校

###### 【国内連携機関】

- ・北陸先端科学技術大学院大学産学官連携推進センター
- ・附高SGH事業サポーター

\*学校資料から抜粋して編集部で作成

方法を提案する」ことを目標として、金沢市、石川県、北陸地域の課題を発見し、解決策を考えるという活動だ。3〜4人でチームを組み、ブレインストーミングや地元の人にヒアリングをした上で課題を抽出する。大きな特徴は、金沢大や北陸先端科学技術大学院大（JAIST）、地元企業、自治体など、外部へのインタビューや体験活動を必ず盛り込む点だ。

「以前、1年生の『生活と社会』で行っていた『地域研究』は、一定の成果を収めていたが、校内のみの活動でした。そのため、インターネットを用いた調査が多く、『地域研究』といいながら、地域や社会とのつながりが弱いことが課題でした。グローバルリーダーを育てるためには、教師の指導だけでなく、外部から人材を招いたり、生徒が地域に出て話を聞いたり体験したりすることが必要だと考え、外部資源を積極的に活用していきます。世界に目を向けているからこそ『泥臭いキャリア教育』という視点が必要だと思っています」（風間副校長）

あるグループは、「能登の祭り」をテーマに設定し、「能登の祭りを生かして観光客を増やすための方法」を提案しようと研究を進めていた。ところが、実際に祭りに参加したところ、伝統を継承するための地域住民の思いや苦労があることを痛感し、「どのように能登の祭りを維持・活性化させるか」というテーマに変更し

た。1学年主任の高橋栄一先生はこう語る。

「地域に、より密着した課題研究とするために、テーマは、後からでも変えてよいことにしています。例えば、生徒が出したアイデアが、地域の人と話す中で、どうの昔に考えられていたものかということが分かり、再考を迫られるといった場合もあります。頭で考えるだけでなく、実際に当事者と触れ合うことが何よりも大切なのだ、生徒は実感するようです。そのため、どのような提案をするかは、地域に入ってから実情を調べながら、柔軟に設定するようにしています」

14年度、生徒が取り組んでいる研究テーマには、「石川の特徴を盛り込んだスマホ向けゲームアプリで石川の知名度を上げる」「石川県非公認キャラクター「たまひめちゃん」を活用した地域振興」「次世代交通で金沢を発展させる」といったものがある。研究の成果は学級内で発表し、各学級の代表を決めて「クラス代表発表会」を開き、更に、協力してもらった地域の人たちにも提案している。

## 台湾の同世代と意見交換をし、グローバルな資質を育てる

次に、1年生後半に行うのが「異文化研究」だ。以前から台湾との文化比較研究を行ってきたが、それは台湾の「日本語を話せる」生徒と

1日交流を行うだけだった。SGHの活動では、訪問先は同じ台湾だが、現地調査も含めた研究内容とした。「異文化研究」以降は今後行う予定の活動だ。1年生後半から3年生にかけての取り組みの方針を見ていく。

生徒は3〜5人のグループに分かれ、「地域課題研究」の成果を踏まえて、台湾での研究テーマを決める。次に、台湾師範大から「英語が話せる」大学生6人を同校に招き、研究テーマについて、英語でディスカッションをする。その中で、テーマについて考えを深め、台湾で何を調査するのか計画を立てる。1年生3学期には、実際に台湾を訪問。訪日した大学生6人に加え、台湾師範大学附属高級中学校（\*）の生徒と共に、各グループのテーマについて、英語でディスカッションを行う。翌日には、台湾師範大学の学生の案内で台湾市内を巡り、調査や現地の人にインタビューを行う。

「異文化の研究にとどまらず、海外の同世代とのコミュニケーションを通じて、生徒のグローバルリーダーとしての資質を磨くことが大きな狙いです。生徒は、『地域課題研究』で地域に深く入り込む活動を行いました。その中で、石川県民、そして日本人としてのアイデンティティーが築かれました。それが、外国人とコミュニケーションを取る際の土台になることを期待しています」（山本先生）

## 教科学習でもSGHの要素を取り入れた指導を行う

異文化体験を生かす場となるのが、2年生で行う「グローバル提案」だ。生徒がいくつかの国に分かれ、その国の立場で議論する「模擬国際会議」を校内外で開く予定でいる。そして、3年生1学期には集大成として「グローバル・キャリアパス」を実施。グローバルな視点から自分の将来像を具体的にイメージさせ、学習の目的意識を涵養<sup>かんよう</sup>したいと考えている。

「大学入合格が最終目的ではなく、自分はどうのように生き、社会にどう貢献できるのかをしっかりと考えさせる学習活動にしたいと考えています」(風間副校長)

教科学習では、SGHを意識したカリキュラムへの改訂を進めている。例えば、英語科では、台湾での生徒との交流や現地調査などで高度な英語力が必要になることを考慮し、金沢大の留学生を7人程招いたディスカッションを2週間に1回、授業の中で行っている。

「初めは英語を話すことに遠慮がちな生徒も、回を重ねるごとに物怖じしなくなり、言葉が出てこなくても、身振り手振りでも何か意思を伝えようとするようになっていきます。自分の考えを伝えたいという姿勢が育まれていると感じています」(山本先生)

数学科では、「数学 Olympiad」(オランダで

開催)の予選を校内で開いた。この大会では、現実世界を数学的観点で解釈し、社会へ還元していく問題に、長時間掛けて複数名で取り組む。世の中への提言を数学的に考え、共同作業で課題に取り組む点が、SGHに求められる力の育成につながる。予選はレポート提出の形で行われ、「天気ほど変わりやすいものはない」という問題に挑んだ。生徒は、授業での学びを活用して、懸命に課題に取り組んだという。

## 「自分のためになる」と意識し前向きに取り組む生徒たち

生徒はSGHをどう受け止めているのか。

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 学校運営を支える1人だと自覚し 責任感を持って改善に取り組んだ

数学科主任 外山康平

以前から同世代の先生と2人で、「この学校をもっと良くするためには」というテーマで話し合い、本校の課題について考えていました。「学校改善プロジェクト」が立ち上がり、自分たち若手の考えをもっと自由に表せるような環境が整った時には、気合いが入りました。普段から管理職の先生などが気さくに話し掛けてくださったからこそ、若手という立場を意識せずに意見を出せたのだと思います。

「学校改善プロジェクト」で、私は「授業改善プロジェクト」のリーダーとして、互いの授業を見合ったり、教師間のコミュニケーションの場を設けたりすることを提案して、実現しました。そうした経験を積み重ねるうちに、「自分も学校運営を支えている1人だ」という責任感が強くなったと思います。SGH準備委員会の委員の1人となり、先生方のビジョンを学校目標として1つにまとめる作業は非常に苦労しましたが、とても勉強になりました。

現在は数学科主任として、数学の授業をSGHの視点で発展させようとしています。数学的な観点で現実社会を捉え、新しい数学の授業をつくり上げたいと意気込んでいます。例えば、先日は「生産性を最大化するために、休憩時間と労働時間の最適なバランスを求める」という問題に取り組みました。このように数学的な観点で考察し、提言する力は、グローバル・リーダーとして大切な資質の1つになると考えています。

「活動前には、教師が生徒に活動の目的や意図を明確に伝えていきます。そのため、生徒は楽しみながら、『将来に役立てよう』と主体的に参加しています。準備などが大変ですが、生徒の姿を見ると、大きな成長が期待できると確信しています」(高橋先生)

特に、以前と比べて、課題研究に対する積極性が高まっているという。一方で、課題研究には長い時間を要するため、生徒の負担を増やしているという側面もある。

「教科学習や部活動、行事などを合わせた生徒の負担を考慮しつつ取り組みを深めていき、北陸発のイノベーションを生み出せる人材を育てていきたいと思っています」(山本先生)